

TOEIC を取り入れた新しい英語授業の試み

諸川 重剛* 神崎 謙一* 荻野 勝*

A Case Study on How to Teach English at University Adopting TOEIC

Shigetake MOROKAWA*, Ken-ichi KANZAKI* and Masaru OGINO*

(Received October 31, 2000)

We tried an experiment to see whether or not it was possible to teach English considering the rising emphasis on TOEIC. Each of the three of us was in charge of five lessons out of fifteen. One taught a section in listening in a language laboratory, another taught a section in grammar and vocabulary, the third taught a section in reading. There was no exam at the end of the semester, but mini-TOEIC tests were administered, and taking the TOEIC was mandatory. Students were evaluated on both their mini-tests and their TOEIC scores.

Student evaluations reflected a positive attitude toward the course. Most students favored the standard of TOEIC as a test of course evaluation. Although we realize there are aspects to be improved (i.e., students' listening ability, class-time efficiency), we should continue to develop English ability focusing on the internationally established medium, TOEIC.

Key words: TESOL at university, teaching English adopting TOEIC, team teaching, experimental program

1 英語授業に新プログラムを導入するに至る経緯

1.1 大学を取り巻く最近の状況

近年、英語教育が議論的となっている。「中高あるいは大学と、6年ないし10年間も英語を学んでいるのに英語が話せない」、「TOEFLでは日本人の成績は最下位に近い」などの英語教育に対する批判や、その解決策として小淵内閣時代に提唱された「英語の第2公用語論」をめぐる論争など、英語教育あるいは英語そのものの意義に関する議論がさまざまなメディアを通じて盛んに行われている。平成12年1月21日には、文部大臣が「英語指導方法等改善の推進に関する懇談会」を組織し、6月30日にはその審議経過報告も出された。

大学の英語教育に関しては、すでに平成10年10月26日に出された大学審議会答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について——競争的環境の中で個性が輝く大学——」の中で「外国語教育の充実や海外留学の推進等を進めると同時に、我が国の歴史や文化への理解、国際社会の直面する重要課題への認識を深めたり、討論、口頭による意見発表や報告、プレゼンテーション等の訓練を通じて自らの主張を明確に表現する能力を育成する

など、国際舞台で活躍できる人材の養成を図ることが重要である」と記され、特に運用力、つまり外国語を聞き話す能力の養成に力点をおくことが強調されている。

1.2 岡山大学での英語教育

教養部廃止（平成6年）以前は、英語の授業内容は各教官に任せられており、授業担当教官が、学生にとって最善と考える内容を、やはり学生にとって最善と考える方法で行っていた。しかし、授業内容について個人レベルで話し合うことはあっても教官同士で議論する機会はなく、授業アンケートも公式には導入されていなかった。ので、ややもすれば独善的な授業に陥るきらいもあった。

教養部時代のカリキュラムでは、学生は英語を週2回（1回90分）2年間履修することになっていたが、大学設置基準の大綱化と教養部廃止・新学部創設に伴い、英語教官が減少する中で、必修科目としての英語の時間数は従来の4分の1、ないしは半減した。そのような厳しい状況下で、大学周辺からの要請や社会のニーズを考慮しつつ、英語の授業を改善しようという動きがあり、岡山大学の教養教育の英語に携わる教官の集団と各学部とで、どのような英語教育が望ましいかという議論がなされた。そして少ない時間でより大きな効果を生み出すために、平成12年度より、英語の二種類の授業、英語A（必修）、英語B（選択）のうち英語Aにおいては、各

* 岡山大学環境理工学部

学部の要望を聞いた上で授業を実施することになった。その方針のもとに、環境理工学部に所属する英語3教官（諸川・神崎・荻野）は、英語の運用能力を向上させるために、TOEICを導入した英語教育を行う計画について各学科と話し合い、環境数理・デザイン・物質の3学科で新プログラムを試みる事が決められた。

1.3 TOEICの概要

21世紀を目前に控えてグローバル化とIT革命が進む中、ビジネスのどの分野においても共通言語としての英語が重要視されるようになってきた。特に、コミュニケーションの手段としての能力が問われ、ここ数年、TOEICの点数で新入社員を採用したり、昇進の要件とする企業が増えてきている。TOEIC (Test of English for International Communication) は、国際的なコミュニケーションのために、英語をどのくらい使えるかを評価する試験である。アメリカのETS (Educational Testing Service) が開発し、世界の約50カ国で実施され、1998年には140万人以上が受験した。日本でも昨年一年間で約80万人の受験者があった。TOEICの特徴は、①世界共通の国際コミュニケーション英語能力テストである、②個人の能力レベルに合わせた目標点が設定できる、③英語によるコミュニケーション能力を公平に評価する、④英語によるコミュニケーション能力が総合的に評価できる、⑤毎回のテストによって評価基準が変動することがない、といわれている。

試験時間は2時間で、リスニングが100問で45分、残りの75分がリーディングとなっており、こちらも100問である。リスニング部門は、パートIの「写真描写」が20問、パートII「応答」30問、パートIII「会話」30問、パートIV「説明文」20問、リーディング部門は、パートV「空所補充」40問、パートVI「誤文訂正」20問、パートVII「速読・読解」40問から構成されている。配点は、各々の部門が495点なので、満点990から5点刻みになっている。

TOEICの得点はTOEFL、英検と比較した場合、およそ以下のような対応がある。

TOEIC	300~395	400~495	500~590	595~650
TOEFL	400~433	435~468	470~501	503~522
英検	3級	2級	2級	準1級

受験者の得点の平均は、平成9年度の資料では、公開テストで580点、団体特別受験で477点である。

TOEICの点数とコミュニケーション能力レベルとの相関関係では、220~470は「通常会話で最低限のコミュニケーションが出来る」、470~730は「日常生活のニーズを充足し、限定された範囲内では業務上のコミュニケーションが可能」、730~860では「どのような状況でも適切な意志の疎通が出来る素地を備えて

いる」と判断される。

TOEIC公開テストの実施は年7回だが、その他に団体特別受験制度 (IP, Institutional Program) があり、団体の都合に合わせて随時行われている。大学生協が実施しているカレッジTOEICはIPの一つである。TOEIC本部は公開テストとIPは同等のものとしている。大学にとっては、カレッジTOEICの方が授業の一部として活用しやすいなどのメリットがあり、岡山大学ではTOEIC公開テストとカレッジTOEICが同じレベルの試験であることを認め、生協を通じてカレッジTOEICを利用している。

2 新プログラムの計画と実施

2.1 授業計画

2.1.1 新プログラムの対象

環境数理、デザイン、物質の3学科に所属する一、二年次生に対し、それぞれ英語Aの1週間1コマ(90分)でTOEICを取り入れた授業を行うことになった。なお必修科目としての英語は、環境理工学部の場合は2年間に渡ってその1週間1コマのみである。

2.1.2 授業の目標

TOEICにおいて600点を取れる英語能力を養成することを目標に置いた。これはTOEICの試験対策をするということではなく、TOEICを一つの指標として総合的な英語のコミュニケーション能力を向上させるという意味である。600点という点数は一つの目安であり、学生としても具体的な数字を与えられたほうが取り組みやすいのではないかと考えた。

2.1.3 授業形態

従来のような1教官が同じクラスに対して前期15回、後期15回を担当するのではなく、授業内容を「リスニング」「文法語彙」「読解」の3分野に分け、各教官が3分野のどれか一つを中心に前期5回ずつ担当し、クラスを入れ替えて教えていく方法を採用した。ティームティーチングの方が1教官が1クラス15回を担当するよりも、各々の分野に集中して教えることが出来、また、成績評価という点を含めて、3教官が1クラスを教えるよりも授業効果に偏りが出にくくなるであろうという判断である。諸川が文法語彙、神崎がリスニング、荻野が読解を担当することになった。

2.1.4 クラス編成

おおよそ環境数理20名、デザイン50名、物質40名なので、デザインの一部を環境数理のクラスに組み入れて、約40名で1クラスを編成することにした。二年次生も同様である。

2.1.5 スケジュール

以下に二年次の或るクラスの授業日程を示す。他のクラスおよび一年次も、担当教官の順序が変わるだけで基本的にこれと同様である。

文法・語彙 (諸川)	4 / 14	ガイダンス・授業
	2 1	ミニテスト・授業
	2 8	授業
	5 / 12	ミニテスト・授業
	1 9	授業
リスニング (神崎)	2 6	授業
	6 / 2	ミニテスト・授業
	9	授業
	1 6	ミニテスト・授業
読解 (荻野)	2 3	授業
	3 0	授業
	7 / 7	ミニテスト・授業
	7 / 8	カレッジ TOEIC
	1 4	授業
	2 1	ミニテスト・授業
	2 8	授業・アンケート

2.1.6 教材

テキストは一年次、二年次生ともに、神崎クラスでリスニング用に *Listen Up!* 「リスニング・パワーアップ講座」 Kimberly Forsythe・成毛信男著（三修社）を使用。諸川クラス、荻野クラスではテキストは用いず、プリントを使用することにした。

2.1.7 成績評価

二年次生は、前期後期の日程の中で、それぞれ1回はカレッジ TOEIC ないしは公開テストを受験し、その結果と授業時に行うミニテストや授業の取り組みなどを総合的に考慮して成績評価する。期末テストはミニテストや TOEIC で代用し、行わない。一年次生には、後期からカレッジ TOEIC を義務づける。シラバスには、ある程度の願望を込めて、TOEIC での 450 点程度を単位認定の最低基準にしたいと書き添えた。

2.2 授業の実施

2.2.1 学生へのガイダンス

平成12年度開講直前の環境理工学部各学科でのガイダンスにおいて、新プログラムでの英語 A の授業について資料を配布し、学生に対し説明を行った。そこでは英語の運用能力を高めるために TOEIC 向けの授業を行い、前期後期各15回のうち、3人の教官が5回ずつを受け持つこと、5週のうちの2回はミニテストを実施すること、一年次生は12月のカレッジ TOEIC、二年次生は7月と12月のカレッジ TOEIC を受験することなどを伝えた。

2.2.2 授業

文法語彙：一、二年次生とも、TOEIC の文法問題にしばしば出題される、時制、仮定法、have something done に関する教材を配布し、文法項目の解説と、宿題である Exercises の答え合わせを行った。またミニテストに関しては、次週の答案返却時に一通りの正解を述べ、Part V、VI の文法語彙の部分を説明した。

リスニング：学生が授業時間外にも練習を行えるよう CD が添付されているテキストを使用した。テキストの中で CD に収録されている部分は学生の自習課題とし、授業では、その課題を聞き直して解答の確認を行った後に、LL 装置（二年次生）やテープレコーダー（一年次生）などを使用して自習課題をベースとした発展的、応用的なリスニング演習を行った。

読解：基礎力の向上を目標とした訳読中心の授業を行った。TOEIC の試験問題に慣れるということも考え、ミニテストに出てきた長文の英文で、教材として適当なものを選び使用した。週一回の授業だけでは足りないもので、それ以外に英文を配布して和訳を宿題とした。最も効率の良い英語学習法として、一度授業で使用したり自分で読んだ英文を、週に一度は読み返すということを紹介して、その実践を学生に促した。

2.2.3 ミニテスト

TOEIC 用の問題から小問単位でピックアップして問題を作成した。90 分の授業の中で行うので、試験時間を1回約40分から50分として、正規の2時間分の問題をそれぞれのセクション毎に3分の1に縮小した。パート I 6 問、パート II 8 問、パート III 8 問、パート IV 4～6 問、パート V 1 3 問、パート VI 7 問、パート VII 1 2～1 6 問、計 5 8～6 4 問とした。初回から4回までは問題形式に慣れさせるという目的で1回を50分で実施し、5回目からは45分に短縮した。一年次生と二年次生では別々の問題を使用した。3人の教官がそれぞれのクラス的答案を1問1点で採点して翌週に返却した。

ミニテストの平均点は以下のようであった。

一年次生

第1回	2回	3回	4回	5回	6回	合計
4/25日	5/9	5/30	6/13	7/4	7/18	
26/60点	23/58	28/62	34/63	30/61	28/62	169/366
(990点満点に換算した得点)						457/990

二年次生

第1回	2回	3回	4回	5回	6回	合計
4/21日	5/12	6/2	6/16	7/7	7/21	
29/58点	30/60	27/63	27/61	31/64	28/62	172/368
(990点満点に換算した得点)						463/990

ミニテストとカレッジ TOEIC の点数を比較した場合、ミニテストの方が平均点が20点程高くなっているが、TOEIC に慣れさせるために、120 分の時間を、ミニテストでは20分前後長く設定したからと思われる。

2.2.4 カレッジ TOEIC

7月8日（土曜日）10時から12時まで岡山大学一般教育棟の教室を利用してカレッジ TOEIC を実施した。3 教室を試験場を使用し、それぞれ1名の教官が監督に当たった。再履修者4名を除き、二年次生128名のうち113名が受験した。欠席は一度も授業に出席していな

い者も含めて15名。平均点は433点, 最高点は655点, 最低点は250点であった。

一年次生は受験を義務付けられていなかったが9名が受験した。一年次生の平均点は444点, 最高点は495点, 最低点は350点であった。

また当日は都合が悪く, 前もって6月7日のカレッジ TOEIC を受験した者が2名あった。得点は360点と335点であった。

6月7日, 7月8日の試験をともに受けられなかった者, 再度受験を希望する者のために, 岡山大学が8月9日に行ったカレッジ TOEIC も前期成績評価の判定資料とした。二年次生では15名が受験し, 平均点は374点, 最高点は455点, 最低点は255点であった。ちなみに, その回のカレッジ TOEIC 全体の平均点は434点であった。

2.2.5 成績評価

一年次生は, カレッジ TOEIC の受験を義務づけていないので, 平常授業時における6回のミニテストの合計点を990点満点に直した後, 優500点, 可350点という基準に合うように100点満点に換算した。良は結果的に425点になった。カレッジ TOEIC を受験した者の TOEIC の得点は, いずれもミニテストを990点満点に換算した点よりも低かったので, ミニテストの方の点数を採用した。上記の処理の結果を, 優80点, 良70, 可60という大学の基準に当てはめると, 優19名, 良58名, 可34名, 不可14名となった。ミニテストを一度も受験していない学生はこの数字に含まれていない。またミニテストの欠席が1回の者に限り, 受験した5回の平均点を欠席したテストの得点とみなして成績を修正した。

二年次生の場合は, 6回のミニテストの合計点を990点満点に換算し, それとカレッジ TOEIC の得点を単純平均した。カレッジ TOEIC を複数回受験した者は一番高い得点を用いた。その点数に一年次生の場合と同じ処理を施した結果, 優21名, 良50名, 可44名, 不可7名となった。再履修者や, ミニテストないしはカレッジ TOEIC を全く受験していない者は数に含まれていない。ミニテストの欠席が1回の者に限り, これも一年次生のケースと同じように扱った。

2.2.6 外部検定試験による単位認定

既に岡山大学評議会において決定されている外部検定試験による単位認定基準,

TOEIC 586点以上 英語 A 4単位

730点以上 英語 A 8単位

に従って, 7月8日に行われたカレッジ TOEIC で586点以上729点以下の成績であった二年次生4名が, 英語 A 4単位の認定を申請し, 承認された。

3 学生の英語学習に対する意識と新プログラムの評価

3.1 調査の概要

TOEIC を導入した新英語学習プログラムが学生にとってどういう意義をもち, 学生はどのように新プログラムを受け止めたのかを調べるため, 半期が終わった時点で受講生に対してアンケート調査を実施した。

調査は, 一年次生は平成12年7月25日, 二年次生は7月28日の, いずれも前期最終週の授業時間内に出席者全員に対して行った。アンケートは選択肢型の18問から構成され, 二年次生には前年度までの授業との比較に関する問を2問追加した。回答は無記名で, 説明文中に「このアンケートは皆さんの英語学習についての意識や新プログラムに対する反応を調査し, 今後の授業改善に役立てるためのものです。回答内容は成績評価とはいっさい関係ありませんので率直に回答して下さい」との指示を入れた。

回答数は,

一年次生: 101

二年次生: 103

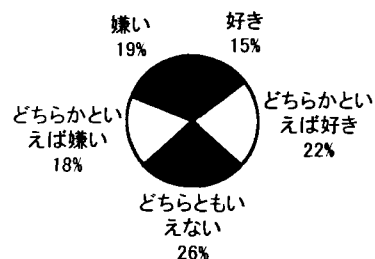
であった。

アンケートにおいては, ①学生の英語および英語教育全般に対する意識, ②学生が大学の英語教育に期待しているもの, ③TOEIC を導入した新しい英語授業に対する評価, の三つを中心課題として問を設定した。

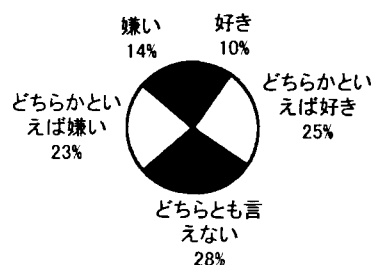
3.2 調査結果と分析

問1. 学校の「教科」としての英語は好きですか。

(一年次生)



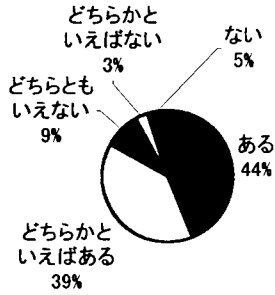
(二年次生)



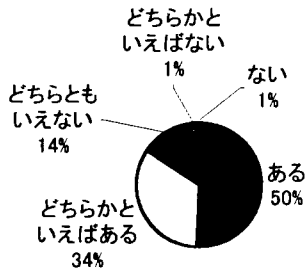
学校教育が学生の英語に対する意識に与える影響を測るため、あえて「教科として」と限定して問を設定した。一年次生、二年次生ともに「好き」傾向と「嫌い」傾向がほぼ拮抗している。理科系の学部であることを考えると、思ったほど英語への嫌悪感がないととらえることもできるかもしれない。

問 2. 国際的な「コミュニケーションの手段」としての英語に関心はありますか。

(一年次生)



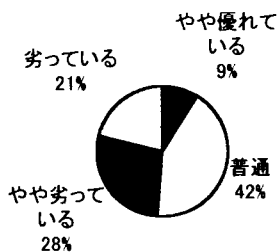
(二年次生)



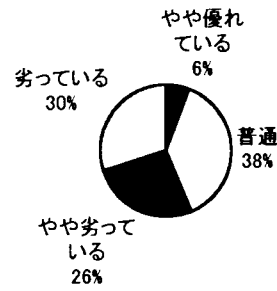
問 1 との対比を見るために英語に対する一般的な関心を問うた。「ある」「どちらかといえばある」が合わせて 8 割を超え、学生の英語に対する関心の高さを示している。その傾向が二年次生においてなお高いのは、大学での授業などを通じて英語の必要性をより強く感じるようになった結果だと推測される。

問 3. 自分の英語の能力をどう評価していますか。主観的評価を答えて下さい。

(一年次生)



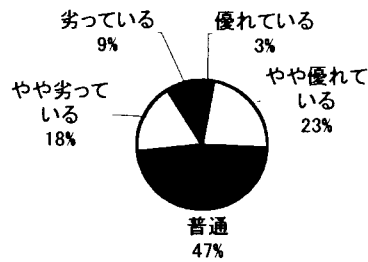
(二年次生)



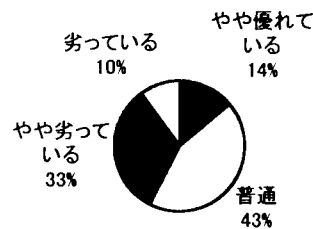
「優れている」と回答した者はゼロであった。「劣っている」「やや劣っている」を合わせると約半数になるが、通常こういう回答にはやや否定的なバイアスがかかるので、その分を考慮すると、まず大学生の平均的な回答と考えられる。

問 4. あなたの英語の能力を「読む」「書く」「聞く」「話す」の四つの技能別に自己評価して下さい。

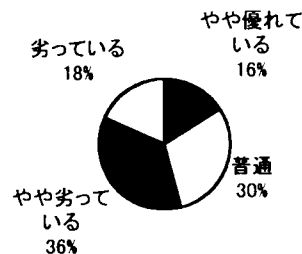
「読む」能力(一年次生)



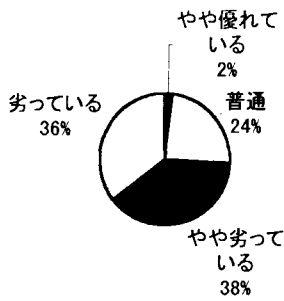
「書く」能力(一年次生)



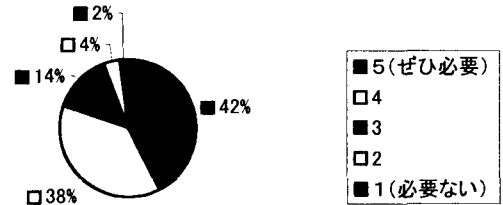
「聞く」能力(一年次生)



「話す」能力(一年次生)



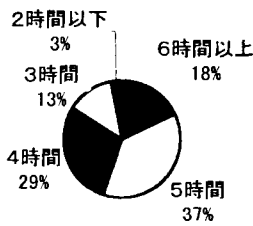
(一年次生)



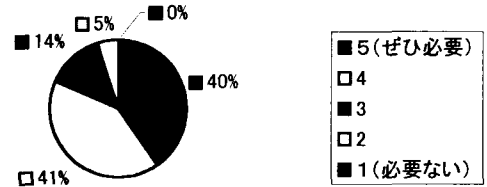
「読む」>「書く」>「聞く」>「話す」という明らかな序列が見て取れる。「聞く」「話す」能力の欠如が学生にも自覚されている。教える側は不足している能力の向上に意を注ぐ必要がある。

問 5. あなたの行っていた高校では三年生の時に英語の授業は週に何時間ありましたか。

(一年次生)



(二年次生)

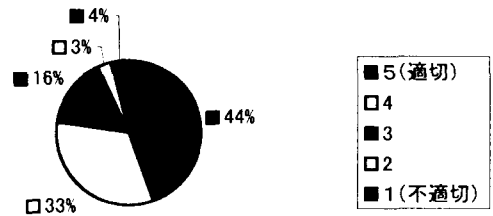
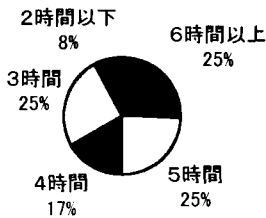


英語第2公用語論まで議論されるような状況の中で、学生も語学力の必要性を痛切に感じている。この意識をどう学習意欲にすくい取っていくかが教える側の課題である。

問 7. 大学での英語教育の目的は何だと思えますか。それぞれの項目について、どれくらい適切かを答え下下さい。

1. 専門分野の勉強のために必要な語学力をつける(一年次生)

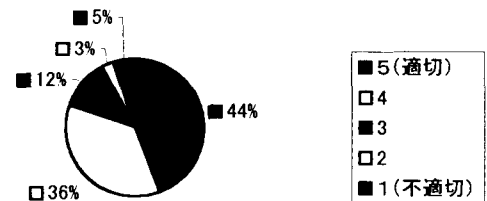
(二年次生)



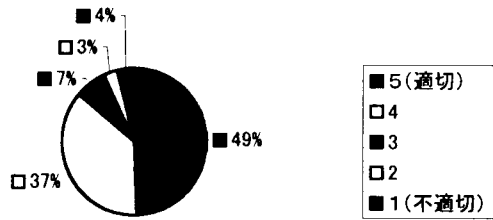
(二年次生)

5時間以上と答えた学生が半数を占める。現在、環境理工学部の一年次生は週に1コマしか英語の授業がなく、高校の時の学習時間との落差が著しい。また、全体として一年次生は二年次生より時間数が少なくなっており、高校での英語の授業時間も減少しつつあることが窺われる。

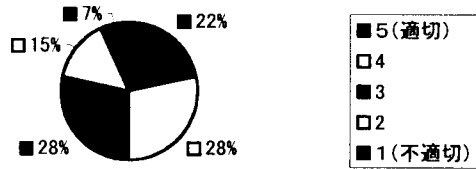
問 6. あなたがこれから生きていく中で英語の語学力の必要性はどのくらいあると感じていますか。



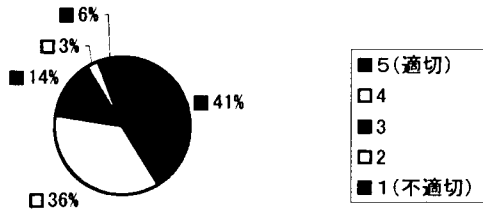
2. 社会人になった時に仕事の上で必要となる語学力をつける(一年次生)



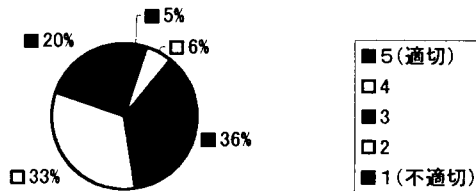
(二年次生)



(二年次生)

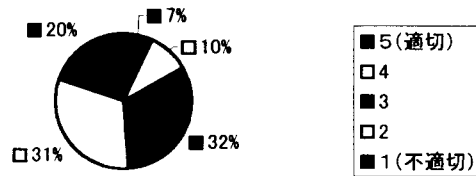
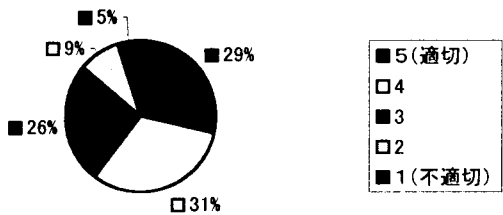


5. 文学作品などを読んで教養を深める(一年次生)

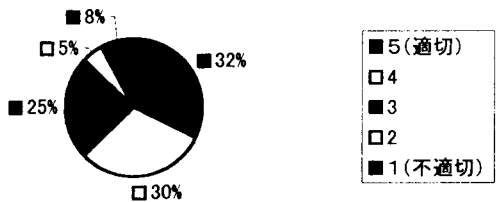


(二年次生)

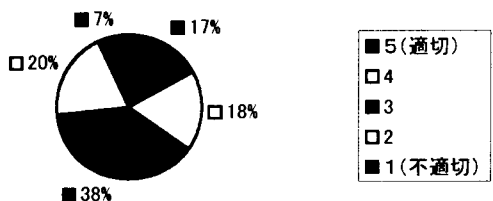
3. 日常生活や海外旅行での外国人とのコミュニケーションのための語学力をつける(一年次生)



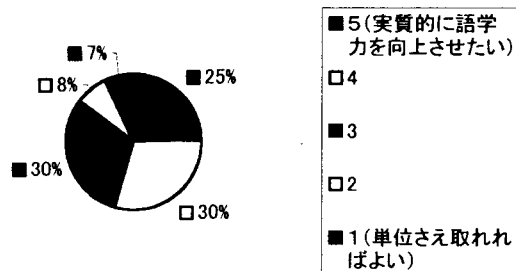
(二年次生)



4. 言葉を通じて、海外の文化、社会事情、生活様式、ものの見方などを学ぶ(一年次生)



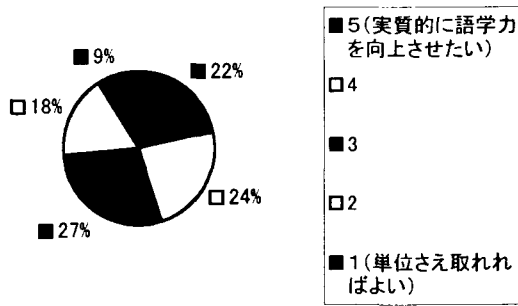
(一年次生)



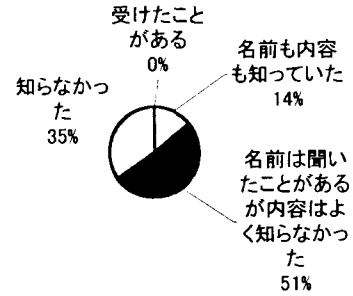
「専門分野の勉強のために必要な語学力をつける」「社会人になった時に仕事の上で必要となる語学力をつける」の二項が高い値を示した。前者は英語論文や学術書を読む能力、英語で研究論文を書く能力が中心となるだろう。後者は、読み書きに加え、会話の能力が必須である。旧来の教養英語がおもに行っていた「文学作品などを読んで教養を深める」は、不適切であるという評価が適切を上回っている。

問 8. あなたは英語の授業にどのような姿勢でのぞんでいますか。

(二年次生)



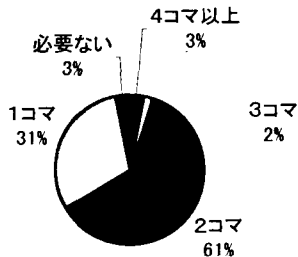
(一年次生)



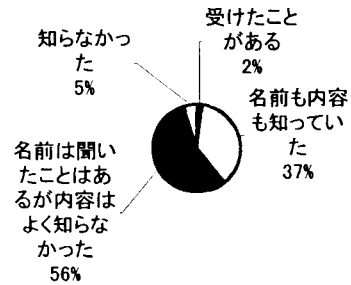
教師が教室で感じている雰囲気から考えると思いがけないほど積極的な回答といえるかもしれない。問6にも現れた社会情勢の変化を強く感じ取っているであろう。一、二年次の回答の比較からは、その意欲が後退していくところが見て取れる。

問9. 大学の一年、二年次において英語の授業時間は週にどのくらい必要だと思いますか。

(一年次生)



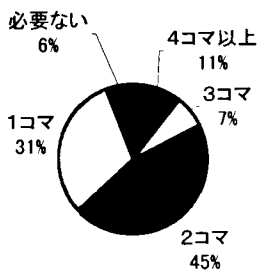
(二年次生)



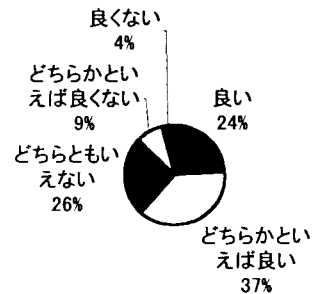
TOEICの認知度を調べた。一、二年次で明らかな差が生じている。大学入学後にTOEICに関する情報に接する機会が増えるのであろう。

問11. 英語の授業にTOEICを導入することをどう思いますか。大学における英語教育のあり方という観点から見た客観的な評価を答えて下さい。

(二年次生)



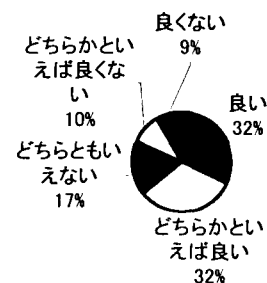
(一年次生)



2コマ以上と回答した学生が6割を超えている。二年次では3コマ、4コマが必要と考える学生も多い。現状の1コマでは時間不足だということは学生自身も感じている。

問10. この授業を受講するまでにTOEICを知っていましたか。

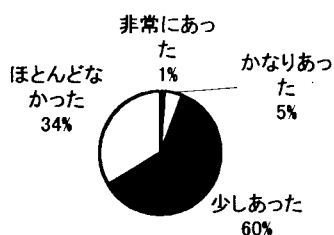
(二年次生)



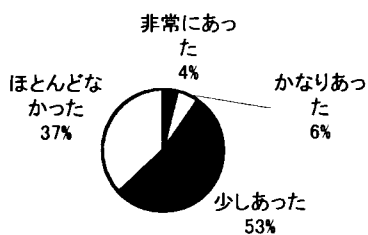
かなり肯定的に受け止められている。「大学における英語教育のあり方という観点」という限定を付けたが、TOEICは、問7で高い値を示した「社会人になった時に仕事の上で必要となる語学力をつける」という目標に合致しているといえる。

問 12. この授業は「実用的な英語運用能力の向上」という点から見て効果がありましたか。

(一年次生)



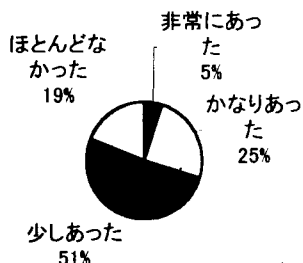
(二年次生)



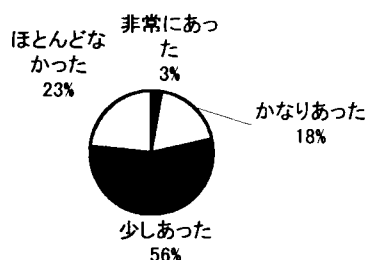
「少しあった」が過半数を占めている。15コマという少ない時間を考えるとやむを得ない結果かもしれないが、より効果的な授業内容の模索が必要であろう。

問 13. この授業は「TOEIC の得点力の向上」という点から見て効果がありましたか。

(一年次生)



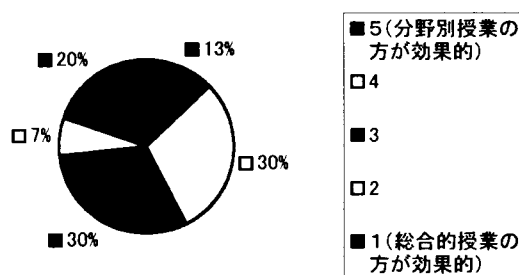
(二年次生)



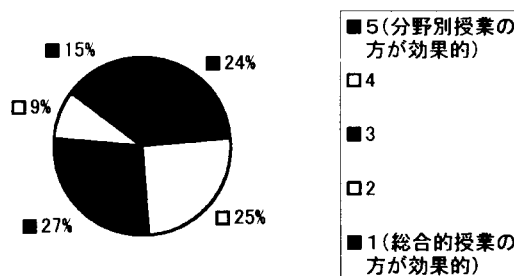
問 12 の回答と較べるとかなり評価が高くなっている。ミニテストを中心とした受験対策授業の色彩が強かったからであろう。これはこれで喜ぶべきことかもしれないが、本来は前問の「実用的な英語運用能力の向上」という効果を狙うべきである。TOEIC の得点はその成果の一つの表現に過ぎないのだから。

問 14. この授業は「文法語彙」「リスニング」「読解」という三つの分野に分けて行いましたが、この形式と、一人の教官が総合的な内容を担当するのと較べて、どちらがより効果的だと思いますか。

(一年次生)



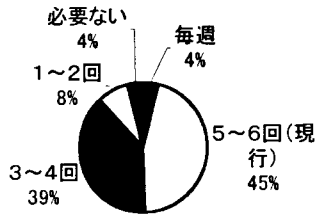
(二年次生)



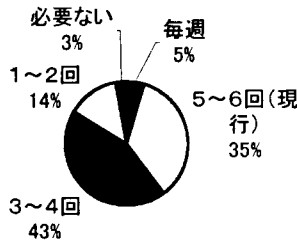
分野別授業への支持が多く、ティームティーチングはある程度成功したと考えてよいだろう。二年次の方が若干支持が高いのは、大学で総合的な英語授業を受けた経験があるからだとも考えられる。

問 15. この授業ではミニテストを6回行いましたが、ミニテストの回数はどのくらいが適切だと思いますか。

(一年次生)



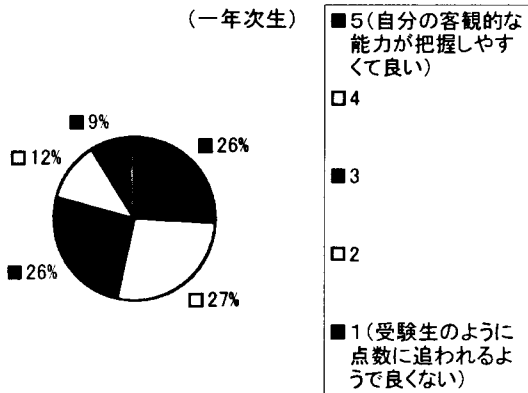
(二年次生)



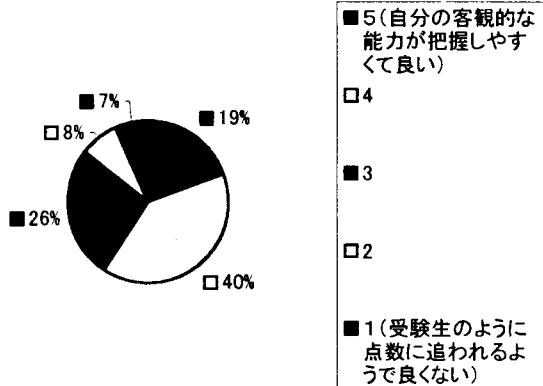
学生がテストの多さに閉口していることを予測していたが、意外にも頻繁なテストに肯定的な回答が多かった。この授業を TOEIC 受験対策と受け止めるか否かというあたりも回答を分けた要素かもしれない。

問 16. TOEIC では語学力が明確な数値で表現されますが、このことをどう感じましたか。

(一年次生)



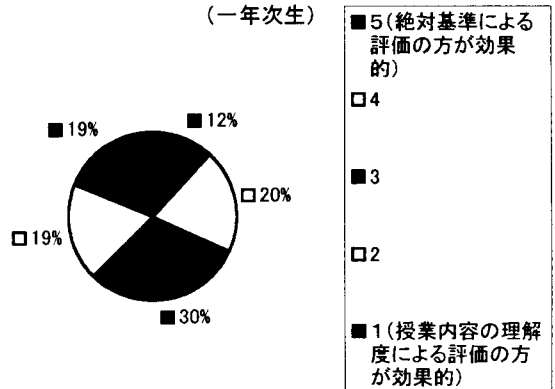
(二年次生)



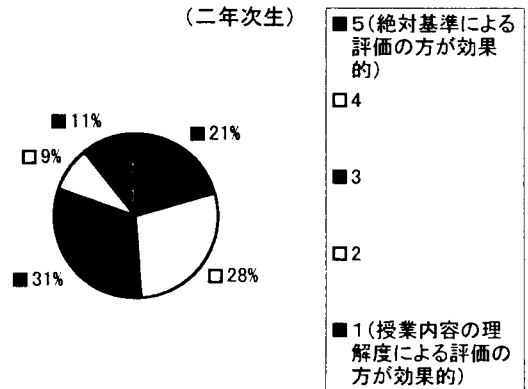
これも思いがけなく肯定的な回答が多かった。インターナショナルな基準で自分の能力を測れるメリットは大きいのであろう。また理科系の学生は数量的な能力の評価や数値目標などに抵抗が少ない傾向があることも考えられる。

問 17. TOEIC のような絶対基準で成績評価が行われるのと、授業内容に対する理解度で評価が行われるのと較べると、語学力の向上という点から見た場合どちらがより効果的だと思いますか。

(一年次生)



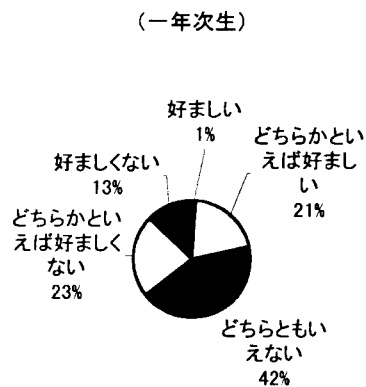
(二年次生)



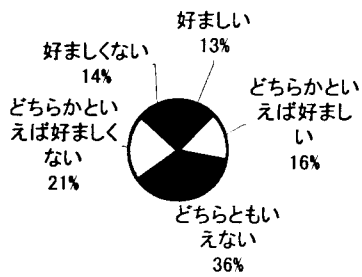
一年次と二年次で明らかな違いが生じた。一年次生の回答は賛否相半ばしているが、二年次生では絶対評価への支持が強い。二年次生は大学での曖昧な成績評価基準や教官ごとの偏りを経験しているからと考えられる。

問 18. TOEIC のような絶対基準で成績評価が行われることは、あなたにとって好ましいですか。

(一年次生)

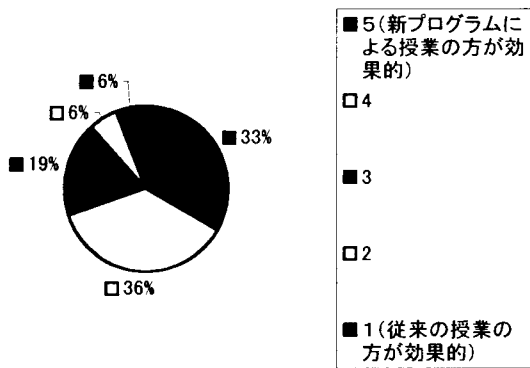


(二年次生)



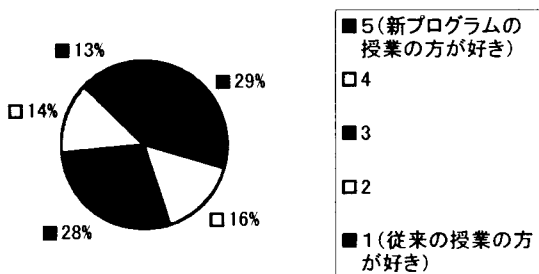
問 17 で客観的な意見を聞いたのに対して、ここでは利害も含んだ好悪を問うてみた。一、二年次とも「好ましくない」傾向が優勢である。問 17 の回答と合わせて受け止めると、絶対評価は学力向上に効果があるかもしれないが、そのために単位を落としたりするのは困る、というのが学生の真情だろう。

問 19. 昨年までの英語の授業と TOEIC を中心にした新プログラムによる英語の授業を較べると、どちらが実用的な英語能力の向上に効果があると思いますか。(二年次生のみ)



肯定的な回答が7割近くを占めた。学生が昨年どんな授業を受けたのか分からないと正しい判断はできないかもしれないが、まず、新プログラムは成功裏にスタートしたと考えてよいであろう。

問 20. 昨年までの英語の授業と新プログラムによる英語の授業を較べると、あなたはどちらが好きですか。(二年次生のみ)



問 18 と同様、効果とは別に好悪を尋ねた。問 19 の回答よりやや後退するが、それでもなお新プログラムの方を好む学生が多数を占めている。ともすると無味乾燥になりがちな授業形態なので、なお学生の関心を引きつける努力が必要であろう。

4 新プログラムの効果と意義

TOEIC を授業に導入することでプラスになる点が3つ考えられる。まず第1に、英語学習に対する新しい視点を学生に与えることである。大学入学以前、ほとんどの学生は受験勉強を通して訳読中心の学習をしてきている。そのため、入学時には英語の勉強=訳読と思い込んでいる者が多いが、TOEIC を取り入れた授業において、国際的なコミュニケーション能力を身につけることの重要性を意識し、それが英語を勉強する新しい動機となり、外国人との意志疎通、あるいは海外の情報を素早く入手するために英語に取り組む姿勢が生まれてくる。この意味で、TOEIC の点数自体が授業の目標になるのではなく、あくまでも英語の運用能力を高めるために学習し、その結果が TOEIC の得点に表れるという姿勢が重要である。

第2に、成績評価の公平性である。大学の授業では一般的に、教員が自らの責任で自由に評価基準を定めて成績を出してきた。何パーセントは「優」何パーセントは「良」というように相対評価をしたり、ある到達目標を定め、それに応じて絶対評価をする者もいた。試験のみではなく授業態度などを考慮する場合もある。しかし、TOEIC という科学的な研究に裏付けられた世界共通基準に基づいて成績評価を行えば、客観性と公平さが期待できる。これに対してはいろいろな意見があるかもしれないが、従来の、ややもすれば恣意的で曖昧になりがちな評価基準に比べれば、一歩前進といえるだろう。

第3に、授業内容や教育方法の改善が挙げられる。従来は教育効果ははっきりと表われにくかったが、毎学期 TOEIC のスコアが出るので、スコアの平均が落ちた場合は、教える側はどこに問題があったのか、その対策を考えなければならない。一方、学生は自分の真の実力が数字として表れるので、本当に身につく授業を求めるようになるであろう。

反面、問題点もいくつか挙げられる。①この新プログラムとは直接的には関係ないが、学生のアンケートにもあった通り、高校の頃、週5時間以上英語の授業を受けていたのに、現在は一週に1コマ・90分のみであるということ。多くの学生は2コマ以上の授業を望んでいる。②TOEIC を取り入れたこの新プログラムでは、コミュニケーション能力の向上は望めるかもしれないが、その一方で、学生が希望している、専門分野の論文を読んだり、書いたりする英語能力をどのようにつけるか、という課題がある。この問題も英語の授業時間の不足から生じているともいえる。③学生が苦手としている、話す・聞く

力を高めるためには、15回の5回をリスニングに当てただけでは充分とはいえない。文法語彙、読解を中心とした授業の中にもリスニングの要素を組み込むことが必要であろう。④ミニテスト、解答解説という形式の授業は単調になりがちである。学生に時々刺激を与えるためには、以前に行われていた英語を通して教養を深めるような内容も大切であろう。

TOEICを導入した新英語教育プログラムは半期が終わったに過ぎず、総括的な評価を行うのは時期尚早であろう。このプログラムで2年間授業を受けた学生が2年後にどのくらい英語の運用能力を向上させているかを測って、初めて第1段階の評価ができるともいえる。しかし、今回の学生アンケートに現れた反応は概ね好評であり、これからの試行錯誤の土台は確認できたと考えている。今後も、絶えず授業の形式や内容に検討を加え、機に応じて学生からのフィードバックを取り入れながら、所期の目的が実現できるよう、このプログラムの改善に取り組んでいきたい。